

ノーベル賞とは関係ない好奇心

志村 良知

本年度のノーベル物理学賞を気候学の真鍋淑郎博士が受賞した。九〇歳というそのお姿は、我がクラブの長老会員たちに共通する若さに満ちている。

博士によると、科学基礎研究の唯一最大のドライビングフォースは好奇心、そして日本の基礎研究の欠点は、若い研究者の好奇心を摘んでしまう協調性重視の体質だという。

私は、複写印刷機メーカーで十五年間、インクなどの消耗品開発の技術者だった。担当商品は、一般の人は知らないところで使われ、形も成さず、次の世に残ることもない。自分でも用途全てを理解していないが、世の中を支えていると信じていた。

商品開発で重要なのは、企画部門から示されるQCD（品質、コスト、納期）の厳守である。新機種発売に合わせてそれこそ絶対、Dはせいぜい一年。そこで好奇心を糧に基礎研究をしている暇はない。しかし若い技術者は好奇心の塊、優秀な者ほど文献や他社特許から見知らぬ技術や材料を探し出し、隠れてまで追試したがる。八〇年代から

はパソコンからメインフレームまでコンピュータが使えるようになり、技術データベースが整備され、数式モデルを立ててのシミュレーションが技術部門横通しで流行ったりもした。

リーダーとしてテーマと数名の部下を預かるようになると、この動きは悩ましい。すべての好奇心を圧殺して「考えるのは俺だ、お前らは手を汚せ」でいけば、原材料調達、生産ラインの能力、企画・販売部門とも報・連・相で協調しつつQCD達成の目途は付けられる。しかし、そういう事は一切考えない若者の好奇心も少しは許す余裕を持たないと技術のブレイクスルーは無い。

実際、決死の覚悟で採用して実用化を図り、周辺技術や設備の限界からガレー船奴隷のような苦役と試作失敗を繰り返した新技術がヒットして数百億円の売り上げにつながった例もある。

目標達成には報・連・相で協調、プラス少しの好奇心。そういう技術者が創り出した製品が人々の日々の生活を支えている。